金曜４限　政治Ⅰ　高橋教官

試験対策プリント（講義ノート）

By T.N.(L12(10))

# 初めに

このプリントは政治Ⅰの授業中に主に自分でとったノートを参考にして講義内容をまとめたものです。だから基本的には間違いはないと思いますが、僕は人間です。そして人間は時にミスをします。というわけで絶対に間違いがないとはいえません。このプリントに間違いがあって試験の結果に影響がでても責任は負いきれないのでご了承ください。

それと高橋教授の具体的な例や説明をとりきれていない部分があるので（とくに最初の方）わかりにくい点もあると思います。

だから試験勉強の際は、自分でとったノート（とってない人もいるかもしれませんが）や他の人が作った今年のシケプリ、過去のシケプリなども参考にするようにしてください。（というよりできたらもっと出来のいいシケプリを見つけてそっちを見て勉強するようにして下さい。）

あと明らかな間違い、誤植などあったらメールで連絡してもらうか、直接言ってもらえると助かりますのでよろしくお願いします。

高橋教官のテストは難しく採点も厳しいらしいですが、みんなで頑張って試験を乗り切りましょう！！

# 評価方法

・試験のみ

・全問記述（過去問を見たところ用語の説明問題が６問で６０点、ある政治的見解に対し意見をだすor論じる問題が４０点の１００点満点のテスト）

・持ち込みは一切不可らしい。

・成績は$\sqrt{素点}$×１０＋α（ゲタ）でだす。

# 001　政治学的思考法とは何か？

（１）経済学的思考法

 　　　 中心は「利益(Benefit)」とその対となる「費用(Cost)」

　　　　他には「効率(Efficiency)」も重要視する。

（２）社会学的思考法

　　　　「役割(Role)」が重要な概念

　　　　　…人間は各々複数の「役割」を持ち関係を有している。

　　　　「社会構造(Social Structure)」

　　　　　…社会と個人の関係を考える

（３）政治学的思考法

「権力(Power)」を有するか否かが大事

　　　　　　…かつては「権力」は実力や暴力に裏打ちされていた。

しかし現代では「リーダーシップ(Leadership)」が要求される。

→「リーダーシップ」の下で「協衝(Cooperation)」が実現する。

⇒皆の利益や「公共性(Public)」が重要な問題に。

　　　　 他には考え等のあわない２者の「共生(Symbiosis)」も重要なテーマ。

# 010　政治科学とは何か？

政治科学(Political Science)≒現代政治学

# 011　政治哲学(Philosophy)

「規範的(Normative)」

…古代ギリシャ時代までさかのぼれる学問で規範的な事を扱い、「事実」と　対になる。

# 012　政治イデオロギー（原理）

「実際的（Practical）」

…規範のレベルで考え次に実行に移す点で「実際的」で、「～すべき」と主張して現実を変えようとする。

# 013 政治科学

「経験的(Empirical)」

…現実を観察し、法則や理論を導き出そうとする。

→「偏見なしで客観的に現実を観察するのは可能か」など課題を抱える。

# 014 注意すべき点

1. 「政治哲学から政治イデオロギーを経て政治科学へと発展した」とするのは誤り。今でも哲学やイデオロギーは重要。
2. 上記の３つの類型は「理念型(Idealtypus)」の分類。

　　　→現実に存在している分類とは違う。

# 020　現代政治学

# 021　特徴

1. 事実と規範の分離

価値中立性／自由性(マックス＝ウェーバー)

…「価値」と「事実」は分離させて考えるべきとする。

1. 経験論

政治哲学や政治イデオロギーが演繹的思考に基づくのに対し、現代政治学は帰納的思考に基づく。

1. 学際性(Interdisciplinary)

確立／独立した学問分野(Discipline)ではなく心理学や経済学などの要素を積極的に取り入れている。

# 022　現代政治学の歴史

1. 行動論革命(Behavioral Revolution)

２０世紀半ばアメリカで起きた運動で、具体的な人間を見て帰納的に法則を見出すことを目指す。

→成果はあったが批判されることにも。

　○ラディカル左翼

　　政治学の「価値から離れ、観察に終始する点」を批判

1. ポスト行動論主義（「脱」行動論主義ではない）

現在の政治学はある意味では全てこれに当てはまるが、特に新制度論(New Institutionalism)について考える。

　　　…多数の過去の（定型化された）行動の積み重ねによって「制度(Institution)」ができる。

　　　そして時代の変化によって人々の定型行動様式は変化する。

→制度とは過去の長期的な行動様式によってできたものだが今の行動を（特に断絶的になったときに）束縛する。

行動論主義…Behaviorを重視

・合理的主義　「拘束」を重視。拘束を減らすべき。

・歴史的制度論　「形成」を重視。拘束の減少には慎重であるべき。

# 023 注意すべき点

1. 政治学は一つの体系をもっているわけではない。

政治学とはDisciplineというよりは一定の傾向をもった学問の呼称といえる。

1. 科学が常に中立的、客観的なものであるとは限らない

「科学革命の構造」(T.S.クーン)によると

…客観的事実の積み重ねによるはずの物理学でさえ単純に積み重ねだけで発展したのではなく、人間の考え方の枠組み(=「パラダイム(Paradigm)」の変化によって結論・真理が変わってきた。

→普遍的真理は存在しない。

# 024 注釈

理論は大きく二分することができる。

1. モデル(Model)

複雑な現実を単純化して取り扱いやすくする。

1. 方法論(Methodology)

モデルを作るための「道具」

実物・現実　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　モデル

　　　　　　　　　　　　　　方法論

# 100 意思決定の基礎理論

# 110 利益関心(Interest)

# 111 概念

1. 基本的な考え方

「行為者(Actor)」が何かを決定するときには「利益関心(Interest)」に基づいて選択する。

→数学的に表現すると*D=f(Ir)*と表現できる。

　(D=「決定(Decision)」、Ir=「利益関心(Interest)」)

1. 利益関心(Interest)
2. 具体的に得になるもの

…経済的なものだけでなく心理的なものや社会的なものも含まれる。

1. 「注意や関心」をひきつける
2. 合理的(Rational)

「目的合理性」…与えられた目的に対して最も良い手段を取る。

# 112　歴史的源泉

1. 人間の合理性

…１７世紀以降に現れた比較的新しい考え方

1. 中世キリスト教の人間観

人間は「絶対者」（＝神）に導かれる存在である。

1. 近代の人間観

「人間は神より劣る存在であるのは間違いないが、**理性**を有するから神に頼らずとも生きることはできる」（ジョン＝ロック）

→自己決定的人間

1. 利益の考えかた

…もともとキリスト教では利益追求はよくないものと考えられていた。

　→ルネッサンス期に変化が

1. マキャヴェリ（「君主論」の著者）

…人間が利益を追求存在だと初めて言及

　…「人間は恐れているものより愛しているものを容赦なく傷つけるものだ。なぜなら人間は元来**邪悪**だからだ。単に恩義の絆でつながれている愛情などは自分の**利害**がからむ時はすぐに断ち切れてしまう。ただ恐れているものには処刑の**恐怖**の鎖で縛られているから決して見殺しにはしない。」

→寛大な指導者より冷酷な指導者のほうが国はまとまるという逆説的な意見（愛情＜利害＜処刑）

1. J．ベンサム

…「功利主義(Utilitarianism)」を主張

1. 幸福(Happiness)

…快楽があり、苦しみのないこと。

1. 幸福の拡大

人間は快楽を望み、苦しみを厭うからこれを行う。

→人間が利益追求する存在という現代の考えの基盤となる。

# 120 影響力(Influence)の理論

「ロビンソン＝クルーソーがフライデーに出合った時、政治が生まれた」

　　…どうやって他人の行動を変えるか

行動の基準は

1. 「行為者」自身の利益関心
2. 他の行為者が別の利益関心のために行動を変えようとする力

→「影響力(Influence)」

→数学的に表現すると*D=f(Ir, If)*と表せる。

　（If=Influence）

# 121概念

以下の説明で　X→影響力を行使するActor

　　　　　　　A→影響力を行使されるActor

1. XがAに対し影響力を持つかどうかは、XとAの「人間関係」で決まる。

例：Xがパトカーに乗った警察官ならAに安全運転させることができるが、Xが普通の学生なら不可能。

→影響力とは実体ではなく「機能(Function)」である。

例：拳銃自体は実体だが、それが持つ影響力は実体をもたない。

1. 「度合」を有する。

単にAll or Nothingではなく気持ちの変化などの目に見えない要素も有しているからその中間段階も存在する。

1. 定義
2. 「影響力を持つ」

…ある行為者の行動、決定、選択を変えることのできる「度合」「程度」

1. その他にも気持ちや態度の変化も考慮に含める。
2. 補助概念
3. 領域（範囲、Domain）

…どれだけの人に対して影響力を有しているか

1. Scope｛日本語のいい訳語がないらしい。過去のシケプリによると「範囲」｝

…どんな点について影響力を持っているか

例：映画好きの人がお勧めの映画とラーメン店を紹介したとき、映画についてはInfluenceを持つが、ラーメンについては持たない。

1. 政治資源(Political Resource)

…影響力行使のためにしようできる手段

　…物理的な力（暴力）や経済的な力（お金）がある。

1. 確実性(Reliability)

…どれだけの確率で影響力を行使できるか

1. 強さ(Strength)

…影響される人に嫌がることをさせるときにどの程度までならそれをさせることが可能か

1. 費用(Cost)

…影響を行使する際に伴う。（どれくらい影響力が下がるか）

　例：あまりに強行採決を頻発すると、求心力が下がってしまう。

# 122 広い意味で影響力に含まれる概念

1. 潜在的影響力(Potential Influence)

(⇔顕在的影響力(Manifest Influence))

…行使されていないが、行使されれば影響を及ぼせる力

例：K泉純一郎は何も発言しないが、もし発言があれば永田町に大きな影響が出る（はず）→K泉の「潜在的影響力」

1. 権力(Power)

…大きな「価値剥奪(Deprivation)」ができる力

※価値剥奪…あるActorが大事と思っているもの（お金とか命など）を奪うこと

　　　…マルクス主義においては国家が独占していると考えるが（＝国家権力）現代政治学においては国家以外にも有しうると考える

（例えばマフィアのボスが手下を殺すのも一種の「権力」による行動）

1. 強制(Coercion)

…行使された影響力に従うか否かにかかわらず、Deprivationが起きること。

　例：金を強盗にとられるか、強盗に殺されるか

1. 権威(Authority)

…影響力を行使された側が納得して従うかどうか

　　　　…権威は何らかの形で「正統性(Legitimacy)」（心理的、論理的に同意させる力）を有している。

　　｛高橋教授はこの場合正しいか否かは関係ないので「正"当”性」は嫌らしい｝

# 123 歴史的源泉

1. 支配／服従の事実

古代においてすでに支配と服従の関係が事実として存在していた。

例：メソポタミアや秦など

（ただし高橋教授はそれがいいこととは思っていない。またすべての地域で存在していたわけではない）

1. 実体的権力観

古代では「権力」という概念が存在せず、分析もされなかった。

→１７C頃から力学が発展するにつれて「権力」が概念化される。

→「権力＝支配する力」と認識される。

　また「理性を超えた(ultima ratio)」ものとみなされ善悪とは無関係とされた。

また中世では「力」は物自体にこもっていると考えられていたが力学の発達に伴い何らかの「力」を加える存在が必要であるということがわかった。

→権力の基礎の考察へ

1. マキャヴェリ

「実力（＝軍事力）」と考えた。

1. M.ウェーバー
2. 血統

ただし１９Cではすでに古い形と考えられていた。

1. 法律

法律に基づき選出された代表が法律を用いて支配する

1. Charisma

超人的であり普通の人間は持っていない能力。これを持っていれば他人から頼られるので他人を支配可能に。

1. K.マルクス

「富（生産手段）」によると考えた

1. 機能的権力観

「権力」とは実体ではなく「関係」であるとみなす。

権力＝関係　→　Leadershipの概念登場。皆の同意が必要となる。

ただしLeadershipは「特別な」や「偉い」というイメージがある。

→「権力＝関係」という考えが行動論革命の中から生まれた「大衆主義」と結び付き皆が持ちうる「影響力(Influence)」の概念が登場。

# 124　批判

1. 構造的権力観から

Influenceはスマートな概念だが最も重要なのは結局「権力(Power)」のはず。

→Influenceの概念に従えば全員がInfluenceを持つはずだから社会全体としてバランスがとれると考えられる（安定的社会観）

→でも現実では皆が幸せなわけではないし支配しているのは一部の人（≒エリート）。だけ。しかも一度エリートになれば簡単には支配層から転落することはなく、逆に一般人はエリートになることは出来ず、ずっと被支配層に属し続ける。

→だから「権力」は関係ではなく動かしようのない実態だ！

この関係は動かせないと考える。

エリート層（ヒエラルキーの上）

一般

※C.W.ミルズ（１９５０年代　アメリカ）

　軍・産業・政＝官の３つのPower Eliteが幸せそうに見えていたアメリカを牛耳っていると考えた。

1. 相互作用論(Interactionism)からの批判

影響の理論は本当に「機能的(Functional)」か？

AがBにActionを起こせばBからAに同じ力(Reaction)が生じるはず。（相互作用）

Action

Reaction

　　　　　　A　　　　　　　　　　B

→影響の理論は一方しか考えていない。

→本当に機能的といえるのか？

例：LeaderとFollowerの関係は一方向ではない。

　　例えばブッシュ大統領はアメリカ国民を導く立場にあるが、ブッシュ自身の行動はアメリカ国民のデモなどに影響されることもある。

# 200 政治的人間の理論

# 201 人間の考え方の展開

1. １８Cまで

「人は神の似姿に作られた」（創世記）

ロックの人間観（自己決定的人間）

→ともに人間は他の動物とは異なる存在と考えていた。

1. C.ダーウィン

１８５９年「種の起源（Origin of Species）」を発表

→人間を一つの種とみなすようになった大きな契機。

→ただし、この頃はまだ人間が肉体的には動物的であっても精神的には違っていると考えていた。

1. S.フロイト

人間にも動物と同じような「本能・欲動(Impulse)」を有している。

→人間は理性以外に「無意識」も有している。

# 202 フロイトの人間観

1. 心の構造

心は部分に分かれ、それぞれ関係を有する。

1. Id

人間が生まれつき持っているもので欲求（欲動(Impulse)、衝動(Drive)）の充足を求める

1. Eros

生、性、自己保存の欲望

1. 死の本能(Death Instinct)

破壊、死などへの欲望（＝タナトス(Thanatos)）

1. 自我(Ego)

Idのうち外界と接触することで発達する部分。Idをコントロールしながら外界と接触する。

ただしそのコントロールは意識的に行われるものと無意識に行われるものがある。

1. 超自我(Superego)

社会の倫理的基準や道徳が内面化されたもの（良心や道徳観など）

1. 批判的機能

Idと対立する性質

1. 自我理想（理想我）の設定

～のようになりたいという目標設定

　　　　　 A,Bは「命令」の形でEgoに働きかける。

　　　　　フロイトの考えたEgoとは力学的な概念といえる。

Superego

Ego

Id

1. 心の働き

「意識(Conscious)」「無意識(Unconscious)」の２つが存在。



1. 重要概念
2. 外傷(Trauma)

心に非常に大きな傷を与える経験

→意識すると自我を大きく傷つけるので無意識化される。（またはその経験をしていない新たな自我を作り出してしまう（＝多重人格））

1. 防衛機構

Idからの欲求が満たせないとき、または超自我の命令に従わずIdからの欲動に従うと罪悪感が生じ、自我を傷つけてしまう。

→それを防ぐために無意識的にはたらく。

1. 抑圧(Repression)

無意識的になかったことにしてしまう。

1. 置換え(Displacement)

抑圧されている欲求の対象を別のものに変えてしまう。

1. 反動形成

無意識のうちに欲求を正反対のものへと変えてしまう。

1. 隔離

事件や出来事からそれに付随する感情を引き離してしまう。

例　地震で子供を亡くしたことをまるで他人事のように感じてしまう。

1. 同一視(Identification)

自我の痛みを消すために他のものと自信を同一視してしまう。

1. 合理化(Rationalization)

正当化のためにもっともらしいまたは社会的に容認される理由をこじつけてしまう。

# 210 政治人(Political Man)の理論

　H. D. Lasswellが提唱

1. H. D. Lasswell

アメリカの政治学者。行動論革命を担った一人。

…J.ロックの考えたような「合理的人間」ではなく、フロイトの概念を導入し「非合理的人間」を政治学に応用。

1. 政治人の理論と人間の行動

*B=f(O)* (B…Behavior O…生活体(Organism))

生活体…具体的には人間のこと。Actorは役割を持ち行動する人間をさすのに対し、Organismは生物一般をさしている）

# 211 基本的な考え方

1. 政治人
2. 政治

制度（利害関係を調整）および機能（人々をまとめる）として政治にかかわる

→政治人はいわゆる「政治家」や「官僚」よりも広い概念。

1. 人

具体的な人間のことではなく、行動の側面のことをさす。

※A. Smithの著書の中にEconomic Man（経済人。経済活動にかかわる人々を抽象化させた概念）という表現がある。政治人もこれと同様抽象的な概念である。

1. 社会観
2. 定義

社会において、人間は資源(Resource)に基づき、制度(Institution)を通じて、価値(Value)を追求する。

※価値…主観的な要素

　制度…組織や法のことではなく「定型化された行動様式」をさす。

　資源…価値追求の際に使う金や時間などのこと。

1. 制度と価値

ある程度は対応関係がある

|  |  |
| --- | --- |
| ***制度*** | ***価値*** |
| ビジネス | 富 |
| 技能職 | 技能 |
| 病院 | 健康 |
| 家庭 | 愛情 |
| 政治 | 権力(Power) |

1. 政治人の定義

ほかの人々と比較した場合、さまざまな価値の中で特に「権力」という価値をより追求しようとする人の類型。

# 212 政治人の定義

*P（政治人）＝p}d}r*

｝…変換記号（～を～に置き換える）

p …Private Motives　個人的な動機

　　幼少期の家庭環境に起因するとラスウェルは考えた。特にエディプス・コンプレックス(Oedips Complex…男児が幼児期に父親に対し嫌悪感を抱く現象、女児が母親に対し嫌悪感を抱く場合はエレクトラ・コンプレックスと呼ぶ)の影響が大きいと考えた。

d …Displacement　置き換え

　　抑圧されている欲求の対象を別のものに変えてしまう。

r …Rationalization　合理化

　　正当化のためにもっともらしいまたは社会的に容認される理由をこじつけてしまう。この場合は「公共の利益(Public Interest)」にしてしまう。

つまり「個人的な動機を置き換えて、さらに公共に利益の名のもとに合理化する」人と言える。

# 213 類型学

1. 性格型と政治的タイプ

|  |  |
| --- | --- |
| 性格型 | 政治的タイプ |
| 強迫型(Compulsive) | 官僚(Administrator) |
| 劇化型(Dramatizing) | 扇動家(Agitator) |
| 冷徹型(Detached) | 外交官(Diplomat) |
| 仲裁者(Conciliation) |

1. 説明

アメリカの裁判官（選挙で選ばれるので政治的色彩を有する）を調査。家庭環境や日常の行動から性格型・政治的タイプを分析。

1. 強迫型(Compulsive)

典型的なパターン：経済的にも社会的にも地位のある家庭で育つ。父は冷徹・厳格。母は子供のことよりも自分の体面を気にするタイプ。兄弟同士争っている。

…「愛情」「温かさ」のない家庭

→物事や人間関係においてパターン通りにしか動かない。細かな点を非常に気にし、融通は利かない。

→政治的には規則一点張り・前例重視

1. 劇化型(Dramatizing)

典型的なパターン：父は下流出身で母は中流階級出身。母は「落ちぶれた」と感じるため子供にすべてを託そうとする。父は口では母に勝てないのでドメスティック・ヴァイオレンスが起きやすい。

…常に緊張している家庭

→子供は親の感情を常に考慮する。他人の気持ちを読むのが上手い。

（例：北野武、A. Hitler）

→自己顕示欲が強い。細部にこだわらず視野は広い。目新しさや多様さを好みそれに早く適用する力がある。

1. 冷徹型

愛情表現や感情が乏しく冷酷な性格。

# 214 批判

1. 歴史的制約

ラスウェルの時代(第一次世界大戦終了後から第二次世界大戦まで)は権力追求者(Power Seeker)が特に多かった。（ヒトラーやムッソリーニ、スターリンなど）

現代ではこうした人物は非常にまれなので権力を無限に追求する人のことよりLeadership/Followershipについて考えるべきではないか？

1. エリート主義

「さまざまな価値の中で特に『権力』という価値をより追求しようとする」ことができるのは一部の人たちのみ。

→ラスウェルはエリート主義の時代を生きていたことの影響がみられる。

1. フロイト的人間観

ラスウェルが幼年期・少年期を重視するのはフロイトの影響。

→しかし幼年期・少年期「だけ」を重視するのは問題あり。

…周囲とのInteractionの影響は無視できない！

# 300 政治集団の理論

# 301 集団(Group)の社会学的定義

1. 共通の目標・関心がある
2. 地位(Status)と役割(Role)の分化

地位と役割に対応する規範(Norm)がある。

例：店長という地位／ベテランとバイトという役割

1. 「我々意識(We Consciousness)」がある

…以上のことから金曜の４限に７４３教室にいる人たちは「集団」といえる（１は達成しているし２も教授と学生でわかれているし、３は同じ大学に属することで達成しているといえる）が井の頭線の渋谷駅のホームに立っている人たちや渋谷のセンター街で遊んでいる人たちは「集団」といえない（少なくとも３が満たされない）

# 302 考え方の歴史

1. ギリシャ・ローマ時代

社会や個人という考え方は存在していたが集団という理論上の考え方は存在しなかった。（もちろん現実には「集団」が存在していたはずだが）

1. 中世
2. キリスト教

Civitas Dei（神の国）の世界観

個々人が神と結び付いていると考える。その個人間での集団という概念が存在しなかった。

1. 封建制…社会有機体説

「貴族（領主）が花びらのような存在であり、農民たちは根っこや茎のような存在である」という考え方。身分による特権の正当化。

1. 近代前半

「集団」概念が登場するもさらに強力な絶対主義国家(Absolute State)が登場。

国の領土etc.は全て国王家の持ちものであり（＝「家産国家(Patrimonial)」）そこに住む人は臣民(Subject)とされる。

→力を蓄えた集団は弾圧される。

※アルトジウス(Johannes Althusius)の政治理論

1. 社会契約説

契約の主体は「家族」

家族が集まる→任意集団（ギルドなど）が形成→任意集団が集まり地域共同体が形成される

→”Civitas”（国）の形成

1. 多元的国家論(Pluralism)

国家も社会集団の一種に過ぎず、権力は国家が独占するのではなくほかの集団もまた権力を有しているという考え。（⇔一元的国家論：国家の存在は特別なものとみなす。死刑等の刑罰を行うなど特別の権力を有する「永久的」存在とみなす。）

権力を山に例えると多元的国家論は八ヶ岳型で一元的国家論は富士山型といえる。

共同体　　　　国家　　　　共同体

諸集団

国家

※多元的国家論は弱者のためのFictionalな理論ではある。ただし国家が他団体より「相対的に」優位であり他集団の調整を行っている考え方は有用。

1. 近代後半

…アルトジウスの社会契約説は発展しなかった（ロック・ルソーらが個人を重視したことからも明らか）

1. 絶対主義の政治理論

J. Bodin(1530~1596)

もともとは封建制の下領主がたくさんいて行政・司法を行っていたが絶対主義の下国王がそうした権力を独占するようになる。

この間に貴族たちの持っていた権利（封建遺制）をつぶす過程が必要であった。

→主権論の登場

※主権：他のあらゆる権利を超越する権利であり、それは国王が持っているとボダンは考えた。

1. 近代政治イデオロギー

個人を守る論理の登場。ただしそれは個人と同時に国家を守る理論でもあった（アナーキズム的な発想ではない）

Thomas Hobbes

…自然法下での社会契約説を個人レベルで考える。「万人の万人に対する闘争」

John Locke

…ボダンが主権を国王のものとしたのに対し主権は国会にあるとした。（議会主権）

Jean-Jacques Rousseau

…人民主権を主張しロックを批判。「イギリスでは人民が主権者になれるのは投票日だけ」

しかし集団の理論は２０世紀に入るまで忘れ去られていた。

# 303 マルクス主義による集団の理論

1. 階級分裂

中世までは役割は違っても全体として一つの社会を構成しているのだという考え（有機体説）が強かった。

しかしマルクスによれば社会は複数の階級に分裂していて、特に支配する資本家と労働者（プロレタリアート）の二つに分けられるとした。

そしてそのどちらかに属するかは「生産手段を有しているか」で決まり、労働者はその労働力を売るしかないが資本家は遊んで暮らすことができると考えた。

1. 階級利害(Class Interest)

資本家と労働者の利害は本質的に対立している。ただしその利害とは資本家・労働者それぞれのなかで共通している状況から生じるものである。（個人的なレベルならアットホームな小企業の工場で社長さんとパートのおばさんが仲が良いということがあり得るが、全体としては対立しているということ）

資本家に共通する状況

（石油の高騰、グローバリゼーション、人件費の高騰、不景気etc.）

労働者に共通する状況

（安い給料、雇用安定性の低さetc）

その状況から生じる要求・利害

その状況から生じる要求・利害

1. 階級意識 Class Consciousness

階級利害を理性的に認識されたときに生じる意識。

→同じ階級に属することで連帯感が生じると考えた。

マルクス主義者はプロレタリアートの解放の重要性を主張する。（本当に正しいかどうかはかなり怪しいけど）

※数式的に表現すると*G=f(Ir,Cs)*と表せる。

(G=Group, Ir=「階級利害(Interest)」,Cs＝「階級意識(Class Consciousness)」)

# 310 集合的選択の理論

K.J.Arrow と M.Olsonの二人が大きくかかわった理論。

ここでの集合とは合理的個人の寄せ集め的な集合を指す。

数式的に表現すると*G=Σ合理的個人*と表せる。

# 311 歴史的源泉

1. ロックの自己決定的人間
2. ベンサムの功利主義(Utilitarianism)
3. 幸福(Happiness)…快楽があり、苦しみのないこと。
4. 幸福の拡大…人間は快楽を望み、苦しみを厭うからこれを行う。
5. よい社会とは…

“Greatest happiness of the greatest number”（最大多数の最大幸福）が達成されていると考えた。

→個人の「幸福」の総和が最大となればよいとした。（”Σ”に通じるものがある）

1. J.S.Mill(1806~1873)

本当に個人の幸福の総和の最大化はできるのかという疑問。

→ミルの「多数決原理」

個人個人にとって最初は自らの利益を最重視している。

→こうした人たちが集まったときに個人の利益をどうすればよいのか。（抑圧すればよいというものではない。なぜならそれは全体主義的な思想につながるから）

1. 個人はその利益に基づき行動する。
2. しかしその利益はバラバラ

→この状況下では何も決まらない。

1. 少数だが自分の利益より全体の利益を重視する人が現れる。

→こちらは常に一致（全体にとっての最善は一つしか存在しないはずだから）

1. すべての人が「討論に参加」して何が正しいのかを「教育」されることで行動が決定される。

→個人の利益が寛容されながらも、皆が「教育」されることにより全体の利益を得ることができる（これが正しいLiberal Democracyだと考えた）

# 312 基本的な考え方

ここでの「集合」とは社会学的なものとは異なりまず個人の利益を主張しようとする。

数学的に表現すると*G=f(Id)=ΣId*と表せる。

（Id=「個人(Individual)」）